



関西いのちの電話



大阪市内を流れる大川べりの桜



いい加減は良い加減

関西医科大学付属病院 医師
関西いのちの電話 評議員 水野 泰行

「積み本免罪符」なるものを御存知だろうか。

インターネットのとある読書サイトの運営者が作っている画像ファイル(ステッカーもあり:<https://suzuri.jp/dokusyoto/6529712/sticker/m/white>)なのだが、一部の読書好きの間で知られているらしい。かく言う私も、未読の本を床に積み上げる「積み読」はかろうじて避けられているものの、棚や机の上に「立て読」と電子書籍を「入れ読」では罪深き人間となってしまう。ところで本を読まずに次々と溜め込んでしまうことは罪なのか。もちろん法律上の罪や道徳上の罪でないのは明らかで、積み読の罪はある種の後ろめたさを表した自虐ネタで、それに対する免罪符というのもネタに呼応したジョークだろう。

ところでこの「罪」という意識は絶対的な神の視点の内面に取り込み良心の起点とする文化で、正しさが世間によって決められる「恥」の文化と対比される。罪も恥も内的な視点から自己を律するのに依拠する意識で、ルース・ベネディクトの『菊と刀』によると日本は恥の文化とされていた。もっともこの本が出版されたのはもう80年近くも前で、現代ではメディアの報道を見る限り随分「恥知らず」な行為が増えている。とは言えやはり

日本人は欧米に比べて圧倒的に「世間の目」を気にすることが多く、それは自己を正しく律する原動力として働くちは良いのだが、一方で自由や自己主張に対する足枷としても作用する諸刃の剣と言える。人目を気にするのは人間関係が無難に機能させる潤滑油にもなるが、気にし過ぎると対人ストレスで思い悩んだり健康を害してしまったりする要因にもなる。

相談電話をかけてくる人にも心身を病んで受診する人にも、もう少し他人の評価を気にせず自由に行動できれば楽なのと思わされることは多い。ほどほどの凶太さやいい加減さは、人の迷惑を顧みず自分勝手になるのとは訳が違い(中にはもうちょっと気にした方が良いと思う人もいるが)、自分を守る盾である。これは見ず知らずの他人のために時間と労力を提供しようとする相談員にもあてはまることで、相談員自身が自分を大切にできていなければ、相談者が自分を尊重するようになる手助けなどできないのではないだろうか。相談業務は目に見える報償はないが、貴重な体験という見返りはある。未永く体験を積み重ねるためにも、相談員自身が自分をいたわってもらいたいと願う。

関西いのちの電話 相談電話 (24時間365日) ☎06-6309-1121
自殺予防いのちの電話 毎日(日・祝含む) 16:00~21:00 毎月10日 午前8:00 ~ 翌日午前8:00 ☎0120-783-556

関西いのちの電話と私（その5）

元 関西いのちの電話相談員
臨床心理士・大阪学院大学学生相談センター相談員 安田 一之

今回が最終回である。今までお読みいただき感謝・感謝である。前回四国遍路の事を書いたが、少し補足したいことがある。

2005年7月29・30日「いのちの電話」の全国研修担当者セミナーが関西の当番で開催された。私は実行委員長という役目だった。それは大きな大会で、ボランティア全員が事前準備にあたり何回も会議があった。当日の設営の主な仕事は事務局の人たちが担って準備してくれていた。私は全国からの参加者に歓迎の挨拶をする役だった。大会は無事に終了した。その帰り道、私は散髪屋に行って頭を丸刈りにした。翌日に四国へ向い、遍路の旅に出た。いよいよこころ密かに思っていた、引退に向けての準備が始まった。私のこころの中では「いのちの電話」を引退する前に自分へのけじめとして、そして60歳代へのお別れとして、思い出に残ること、四国遍路をしようと考えていた。7月31日7時30分梅田発のバスに乗って徳島に向かった。天気も良く私は歩き始め9月5日に結願できた。その日は朝から雨であった。路上に落ちていた、毬に包まれた外皮から、中身の青い実を取り出して食べた。全く苦さは感じなくうまかった。

それを終えて、様々の事を感じたはずであるが、意識的には思い当たらなかった。あるとすれば、8月の暑い四国の山河を歩くことができ体力があったということであろうか。しかし、それも様々な人との出会いがあり助けがあつての事であった。多くの人との出会いや偶然の出来事が助けとなりまた励ましとなって、四国の大自然の中を歩き続けることができた。人との出会いや助けが

大きな力となったのは、人の一生も同じことだと言える。さらに自分が思っているよりもっともっと大いなるものの力が、働いてくれた。我々が生きていくことにもこの力が働いてくれていると思う。そうだ、最も大きいことは、より大いなるものに守られて歩き続けられたという実感であろう。

私は「いのちの電話」で、ボランティア活動をさせてもらうことで、人生の方向性を教わり、生き方や考え方を学ばせてもらったと思っている。

「いのち電話と私」というテーマをいただいて書き始めた文章も終わりが見えてきた。現役の相談員を終えた今も、今までの経験を生かして自分にできる方法で、養成講座など「関西いのちの電話」に関わらせてもらっているのは有難いことである。

人は生まれ生きる。そして成長していく。その過程で悩むのは当然のことである。「いのちの電話」がこれからも自身の成長を願い、悩む人々に必要とされることは必然だと思われる。



筆者

プロフィール
高校教員を経て大阪学院大学教授を務め、現在は同大学学生相談センター相談員。関西いのちの電話では1979年から42年間、相談員、理事、訓練委員長を歴任し、現在も養成講座講師、研修会講師、傾聴セミナー講師を務めている。

関西いのちの電話 第40回公開講座

取材から見えてきた児童虐待

日時：2023年2月12日(土) 場所：ドーンセンター(大阪府立男女共同参画・青少年センター) 7階ホール

講師 すぎやま はる 杉山春氏 ルポライター

2月12日(土)ドーンセンター7階ホールにて、第40回公開講座「取材から見えてきた児童虐待」が開催されました。

多くのご支援、ご協力により開催できたこと、新型コロナウイルス感染拡大防止の対策をとりつつ、200名近い方々が訪れてくださったことを心より感謝いたします。

ルポライター杉山春さんは、長年児童虐待、家族問題、ひきこもり、自死などについて取材を重ねてこられ、著書に『満州女塾』(新潮社)、『ネグレクト 真奈ちゃんはなぜ死んだか』(小学館文庫 第11回小学館ノンフィクション大賞受賞)、『移民還流』(新潮社)、『ルポ虐待:大阪二児置き去り死事件』(ちくま新書)、『家族幻想 ひきこもりから問う』(ちくま新書)、『自死は、向き合える』(岩波ブックレット)、『児童虐待から考える 社会は家族に何を強いてきたか』(朝日新聞出版)などがあります。また、公営団地内で子どもや母親の居場所づくりを仲間と一緒に運営されています。

杉山さんはルポライターという仕事を通して、自分自身の生き難さを解消していく、理解していくために本を書いてきたそうです。虐待、ひきこもり、自死などの裁判傍聴や現場に赴いて関係者への取材を重ねていく中で、背景にある家族の課題についても考えるようになり、自分自身も楽になってきたとのことでした。柔らかく温かいお声でのお話に、冒頭から引き込まれました。

2000年以降に起きた3つの虐待事件を取り上げられ、それらがなぜ起こってしまったのか、丹念な取材によるお話はとても分かりやすく、説得力がありました。児童虐待の背後には、DV、生活の困窮、ジェンダー、社会の価値観などさまざまな問題が絡み合い、まさに現代社会の闇をあぶりだすようでした。『家庭の三つの資源』(サンドラ・ウォルマン)を引用し、子育てには、「土地」「労働力」「資本」といった「構造的資源」だけでなく、「時間」「情報」「アイデンティティ(所属・自尊心)」の3つからなる「編成的資源」が重要であり、人はアイデンティティがないとその資源を使えない、と深く考えるようになったとのことはお話印象深かったです。支援する側の適切な対応が不可欠であることを痛感しました。

DVの理解については、「DVの本質は支配とコントロールである。被害者にも加害者にも自尊感情の弱さがあり、それが社会に対する恐怖心を引き起こしている。それを拭うために家庭内で自分より弱いものを自分の思い通りにコントロールしようとする。このような背景が彼らの生き難さの根本にあり、社会の支援から逃げてしまう、自ら孤立への道を選んでしまうのではないか」と話されました。「家庭の中に侮蔑の言葉が飛び交っていた」という実態も多くあり、「子どもの育成についての責任は家族にある」という価値感が正義(嫉)として作用しているとも感じたそうです。

DVの支援は、まず当事者の声を聞き取り、主体として尊重した上での支援が大切であると杉山さんは強調されます。「この社会はあなたの、そして、私の場所だ」という対等性が重要であると。そして現代の社会が抱えているさまざまな問題が児童虐待につながり、それを理解しようと動く人の力がうまく連携する必要があるとも話されました。

いのちの電話は、声を聞き取ることを丁寧に行っており、当事者にはとても必要であること、共に生きる場所としての大切な役割を担っていることを話していただきました。改めて傾聴と寄り添いの大切さを感じ、これからのいのちの電話の活動を通して向き合っていきたいと思います。



あたたかいご支援ありがとうございます

2022年11月1日～2023年2月28日までに、次の方々から社会福祉法人関西いのちの電話への寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。今後ともご指導、ご協力をお願い申し上げます。(五十音順 敬称略)

【個人】

浅野 敏行	宇野喜 旬子	勝見 智子	桜井 和之	高谷 三郎	西村 博子	宗像千代子
荒木 寛子	大坂 雅巳	金岡 重雄	佐治千栄子	竹村 武男	野崎 京子	宗行孝之介
荒屋 昌弘	大塚 伸二	神谷 尚孝	左藤 章	田中 義信	濱崎 正三	望月 拓郎
壹岐 友香	大津 久直	河内 俊之	幣原 直子	土屋 俊平	浜本由紀子	森本美紗子
石附 康子	大場千恵子	河辺 哲郎	柴峠 隆士	筒井久美子	林 竜弘	安岡久美子
今谷 由美	大畑 了子	岸本 彰五	志水紀代子	道免 逸子	林 幸	山内 通生
今村 良子	小頭 誠	北川 美香	白方 誠彌	代理人 長尾芽衣	日野 基子	山本 雅司
岩下 剛	小川 晃司	北之坊皓司	菅谷 道子	中谷 治	藤田 淑雄	米澤 澄子
岩本 和代	織田 育与	康 由美	杉浦眞喜子	長野加代子	松野 五郎	匿名13名
上坂 和美	落合 雅子	呉 美憲	隅田 保	中野 爲夫	水中 照子	
疇地 道俊	影浦 邦子	Cornwell Steven Scott	高橋 明	中野 桂子	ミヤザキヒロシ	

【団体】

愛徳カルメル会 本部修道院 (有)あさひ保険 医療法人 いちえ有希クリニック 宗教法人 援助マリア修道会 大阪聖コゼツ宣教修道女会 大阪府共同募金会 小林聖心女子学院 奉仕部 ナンバかきもとメンタルクリニック カトリック鈴蘭台教会 カルメル会修道院 学校法人関西学院 財務課 (医)キム診療所 京谷クリニック 合資会社 寿屋 コニシ株式会社	在日大韓基督教会向上社保育園 聖バルナバ病院 礼拝堂 聖母被昇天修道会 西成修道院 聖母奉献修道会 直の会 日本イエスキリスト教団 垂水教会 日本カトリック教会 玉造教会 日本キリスト教会 香里園教会 日本キリスト教会 西宮中央教会 日本キリスト教団 千里丘教会 日本基督教団 大阪北教会 社年会 日本基督教団 甲子園二葉教会 日本基督教団 甲子園二葉教会 ガリラヤ会 日本基督教団 阿倍野教会 日本基督教団 池田五山教会	日本基督教団 伊丹教会 婦人会 日本基督教団 茨木東教会 日本基督教団 大阪教会 日本基督教団 大阪東十三教会 女性の会 日本基督教団 交野教会 日本基督教団 神戸雲内教会 日本基督教団 聖峰教会 日本基督教団 高石教会 日本基督教団 塚口教会 日本基督教団 豊中教会 日本基督教団 東梅田教会 日本基督教団 武庫之荘教会 日本キリスト教婦人矯風会 大阪支部 日本自由メソジスト教会 布施源氏丘教会 日本聖公会 大阪教区婦人会	日本聖公会 大阪聖愛教会 日本ナザレン教団 大阪桃谷教会 日本バプテスト宣道団 池田キリスト教会 日本バプテスト大阪教会 (宗)池田バプテスト教会 能勢ライオンズクラブ 梅花中学校・高等学校 松村クリニック (株)マツヤ メンタルクリニックおかだ やすだメンタルクリニック 大阪帝塚山ライオンズクラブ レデンブトリスチン修道院 匿名 1件
--	---	---	--

バザー等協力【個人】

綾部 直可子	島 弘子
植杉 典子	志摩ひろみ
小池 葉子	浜本由起子
小崎 公子	細田 敦子

バザー等協力【団体】

江崎グリコ株式会社	大阪 YMCA 英語幼児園 土佐堀園	北摂 YMCA
大阪 YMCA 統括本部	大阪南 YMCA	YMCA かわにし保育園
大阪 YMCA 中高齢事業推進室	土佐堀 YMCA	
大阪 YMCA ランゲージセンター土佐堀	桃の里 YMCA	

◎他に相談員・理事・評議員・有志などが支えています。

こんなこともやりました！あいました！

2022年12月～2023年2月

注記：連盟 = 一般社団法人 日本いのちの電話連盟

- ・12月2日 連盟・広報委員会(広報委員長リモート参加)
- ・12月8日 光回線(事務局)工事
- ・12月20日 事務局大掃除
- ・1月16日 連盟・中部・近畿ブロック会議(理事長出席/事務局長リモート参加)
- ・1月17日 大阪府自殺対策審議会(理事長出席)
- ・1月17日 第4回理事会
- ・1月29日 「第40回公開講座」に対する新聞記者の取材
- ・2月10日 京都いのちの電話訪問(研修委員4名)
- ・2月12日 第40回公開講座主催(於：ドーンセンター)

24時間・365日「眠らぬダイヤル」として
相談活動をおこなっています。

皆さまのご支援が、電話をつなぎ「いのち」をつなげます。
いのちの電話の活動を支えてください。

募金をお願いします

お振込先

※社会福祉法人へのご寄付は税制上優遇されます。

口座名義：社会福祉法人関西いのちの電話

口座番号：ゆうちょ銀行 00990-3-68480

：三井住友銀行 十三支店(普) 998829

永年相談活動者の「思い」

今年は、認定式と永年感謝式は4月22日に開催されます。永年活動者として、40年(18期)1名、30年(27期)2名、20年(37期)10名、10年(47期)12名の方々を代表して、各期からそれぞれ1名、4人の方に、活動を続けてこられたことを振り返り、その「思い」を語っていただきました。

相談者の安堵した声に支えられて

認定を頂いた時に、「最寄の駅を降りたその時から、貴女の雑念を払いカウンセラーとしての自覚を持って進んで下さい」と言われ、身の引き締まる思いをしました。40年前の初めての電話で、男性のクライアントから「プロに出てもらって下さい」と言われました。「私の担当の時間です。まず私にお話を聴かせて下さい」と伝え、聴く事に専念しました。男性の話が終わった後に「他の人と変わる事をご希望ですか」と尋ねると、男性は「あなたで良かった。自分の弱部分を素直にさらけ出す事が出来た」と泣かれました。「妻ともう一度息子の事を話し合います」と終わりました。私は昔大手術をし、孤独と不安で泣いた日もありましたが、18期生の仲間、「真夜中でも電話を掛けてくれてもいいよ」と言ってもらい電話のありがたみを知りました。いのちの電話の「いつでも聴いてもらえる事」がとても大切だと痛感しました。いのちの電話に関わって下さった諸先生や、仲間のおかげで、ここまで来ることができました。もし勉強するチャンスがなかったら、大変な大人になっていた事でしょう。波に揺れる小舟のようですが無事に島に着きたいと思います。自分を見つめ直す事の出来たいのちの電話に感謝です。

18期 Y.N.

寄り添いながら30年

私がいのちの電話にかかわる事になったのは、朝日新聞の募集広告からです。私はその時老人病院に勤務していて、お年寄の話し相手になりながら、ほとんどの方が家族から見放され寂しい思いをされていることに気がきました。

面接、一泊研修、週一の講義、今から思えば「良く続けて来られたなあ!」と感慨深いものがあります。家族の協力、健康にめぐまれた事で続ける事が出来ました。同期の方が途中で辞められたり、道半ばにして亡くなられたりして悲しい事もたくさんありました。いのちの電話では怒られたりした事もありましたが「有難う」と言われた時は続ける勇気がわきました。そして30年の月日が流れ今日を迎えました。「本当に早かった」いのちの電話に携わった事はやりがいがあり、生きがいでした。そしてこれを機に若い期の相談員さん達へバトンタッチしようと思っています。支えて頂いた皆様に御礼と感謝致します。有難うございました。

27期 A.H.

別の世界を知ることができた

会社を定年退職する際、これからの第2の職場は昼間だけ、夜は空いているので、と誘われて、電話担当や研修も夜だけで20年続けることができた。会社では論理や利害得失が判断基準であったが、いのちの電話では人間が対象であり、心や感情が問題であって、全く別の世界であった。電話の向こうでは、今まで全く知らなかったような悩みを抱えた多くの人達がいることを知った。私は学生時代から第2の職場にいたるまで殆ど男性ばかりの世界で生きてきたと気づいたが、いのちの電話では女性が圧倒的に多いことも私にとっては新しいことであり、無報酬のボランティアで活動している人達がこんなに多いことも驚きであった。事業企画委員会ではチャリティコンサートや公開講座の企画運営に参画できたこともそれまでにない経験であった。このようにいのちの電話に関わることによって、それまでの私とは全く別の世界の多くの人々から多くのことを学ぶことができたことに感謝しています。

37期 K.Y.

手紙

この10年を支えそしてこれからも支えたい大切な3通の手紙があります。

1通目は養成期間1年目の終わりにスーパーバイザーから頂いたもので、かけ手の話を聞いてすっかり動揺してしんどくなっている私に「聴くということは時計の振り子のように自分の立つ位置をしっかりと不動にしていっしょに揺れてあげることです。(中略)そしてここで体験したことはこれからのあなたに決して無駄にはならないですから」と結ばれていました。

2通目は相談員になって1年目に11期の大先輩からの手紙で、すぐに気持ちだけで突っ走ってしまう私に「身の丈に合った隣人愛」というプリントと一緒に「無理をしないで自分のペースで継続し積み重ねていくことが大切」ということを伝えてくださいました。

3通目の手紙は自殺実行中の電話を受けた時に事務局から駆けつけて筆談でもって最後まで支えて下さった方からの手紙で「しんどさを抱えたままになっていませんか? 仲間に話して解消しておくこと今後の成長の糧になると思います。」と書かれていて怖さと共に一人で受けきれなかった不甲斐なさですっかり落ち込んでいた私はまたブースに入ることが出来るようになりました。

この3通の手紙はいのちの電話の「聴くこと」「関わること」そして「仲間がいること」を言葉にして届けてくれたのです。そしてこの10年は私自身を少し深く広く優しくしてくれたように思っています。

感謝を込めて 47期 M.K.

聴いてもらって、聞かせてもらって、ありがとう

《日々の相談の中から、かけ手の「感謝」「心に響くことば」をお知らせします》

天涯孤独。いのちの電話はもう20年かけている。母が亡くなって鬱の時も、コロナで精神がむしばまれている時、いのちの電話は命綱。ずっとずっと続けてほしい。

特に何かが変わるわけではないけれど、話を聞いてもらえるだけでも助かる。ありがとうございます。



強迫性障害で10年です。考えなくてもよいことをずっと考えてしまってほとんど眠れない。電話をかける前は頭の中がいっぱいいっぱいでとてもしんどかったけれども、こうやって話を聴いてもらうといっぱいだった頭が少し減って落ち着くんです。



問いかけることと共感 22 「言葉の背後を聴く」

いのちの電話のかけ手の中には、延々と自分の今の状況を話す人がいます。そのかけ手は、時には、何度も電話をかけてきて、毎回同じような話を繰り返します。聴き手の相談員はいのちの電話の基本姿勢である「一期一会」で聴こうとするのです。

しかし、聴き手にとって、初めてのかけ手であれば、新鮮な想いで聴こうとするのですが、2回目、3回目と同じ人に出会うと、「一期一会」だけで聴いておられなくなるのです。

このような時に、「この人はなぜこの話を電話で私に話しているのだろうか?」と自問しながら耳を傾けてはいかがでしょうか。

そのかけ手は、自分の物語を話しますが、その物語の現状認識や意味を分かっているわけではありません。

そのことを受け入れた上で、質問を投げかけ、もう少し詳しく話すように働きかけるのです。そうすることで、かけ手の置かれている現在の状況をかけ手自身が気づき、さらにそのような状況にいる自分の意味に気づくことができるのです。

これはカール・ロジャースが提示している「アクティブリスニング(積極的傾聴)」です。

かけ手の話していることがらに注目することを極力少なくして、聞こえてくる相手の言葉の背後に潜んでいる考え、感情、その人にとっての意味、さらにはかけ手の無意識下にある意味をも聴き取っていく。このような姿勢で、臨んでみてはいかがでしょうか。

そうすることによって、かけ手は自分がこの物語を語る意図は何なのか、その状況にいる意味が一体、何なのかを言葉にすることができるかもしれないのです。そのことを引き出すことが聴き手の仕事なのではないかと思えます。

(参考:ケイト・マーフィ著『LISTEN——知性豊かで創造力がある人になれる』(p.118). 日経BP. Kindle版.)

(長尾文雄・元大阪女学院大学／短大講師)

創立50周年を迎えるにあたって… ～感謝の思い～

関西いのちの電話は、本年度創立50周年を迎えます。ルツ・ヘットカンプ宣教師が、欧米で実施されていた電話相談を日本で始めようと、知人友人たちに呼びかけ創設された東京いのちの電話。それに刺激を受け2年間の準備を経て、関西いのちの電話は、1973年9月に立ち上げられました。

当時の様子を記録で見ると、場所探し・資金捻出・相談員募集／育成・組織編成に奮闘されている様子がありありとつづられており、当時の関係者の方々のご苦労が伺えます。

50年後の今、私たちはどうかと申せば、最初の時と同じ様に、事業所移転問題、運営資金捻出・相談員応募減少に伴う募集活動・養成研修活動に奮闘しているのが実情です。

また、世情は、創設時1973年、中東戦争に伴うオイルショック・狂乱物価、2023年現在、ウクライナ・ロシア戦争に伴う原油高騰・諸物価高騰と、驚くほど似ております。

活動メンバーもたくさん集まり、事業も安定していると外形的には見えるのですが、「孤独で苦悩している人に電話で寄り添う」

相談活動は、1年1年の奮闘の歩みそのものです。その積み重ねによって50年間存続することができているのは、何より、今なお支援・資金・労力を捧げてくださる皆様がおられるからです。本当に感謝です。

焚くほどは風がもてくる落葉かな 良寛

自分たちが、何か世の為に偉いことをしているなどと、奢る気持ちを持つことなく謙虚に歩ませていただきたいと思えます。

50年間の「関西いのちの電話」の活動は、電話受信件数約940,000件、養成講座開催57回、養成相談員数約1,700人、実働相談員数約16,000人(延数)、活動日数約18,000日、事業総経費約9億円、賛助・寄附の資金ボランティア(個人団体)約26,000口(延数)、暦年のバザー・チャリティーコンサート・公開講座等のご協力者は数知れません。

これからも続く電話相談活動に、どうぞご協力を宜しくお願い申し上げます。

この広報誌は、令和4年12月に実施された大阪府共同募金会の助成を受けて発行しています。府民(寄付者)のみなさまに感謝いたします。

編集後記

「創立50周年を迎えるにあたって…」の記事で、現在は50年前と同じ世情と記されている。歴史は繰り返すといわれるが、人類は同じ過ちを、そして弱い立場の人にその悪影響がより強く及ぶのだと、今の世界を見ていて知る。

「公開講座」の記事で、児童虐待やDVという家庭内での問題も、強者から弱者への力の波及と語られている。

目を閉じ、口を噤み、耳を塞いで、耐え忍ぶ生活をしている多くの弱い立場の人が、ヒソヒソと電話をかけて、その苦悩を語る。苦悩の声を丁寧に聴くことで、かけ手が閉ざした心を開き、涙声から笑い声になり、一瞬でも穏やかな気持ちになることを願って、我々は聴き続ける。(H.S)

電話相談受信状況(2022年～2023年)

受信月	11月	12月	1月	2月
受信件数	1,404件	1,472件	1,394件	1,387件
相談員数(延)	426人	422人	390人	416人

社会福祉法人 関西いのちの電話

事務局 〒532-0028 大阪市淀川区十三元今里3-1-72
TEL 06-6308-6868
FAX 06-6308-6180

発行人 李清一 編集 広報委員会
ホームページ <https://kaindnew.com>

